

「戦国時代、齊の国王は、友好国の燕の国が近隣の小国と戦った時、燕国を助けるために管仲に軍隊を預けて派遣しました。彼らは春に出発したのですが、思いがけず激しい戦いになってしまい、戦いが終わって帰国出来ることになった時には、もう冬になっていました。

軍隊はやっと帰国出来ることになって、喜び勇んで出発しましたが、途中、山の中で道に迷ってしまいました。随分たくさん歩いて、もう山を抜けるはずだと思ったのに、又見覚えのある処へ戻ってしまいます(登山やスキーで、道に迷い同じところを歩き回る、いわゆるリングワンデリングに陥ってしまったのです)。それを何回も繰り返したので、管仲は焦りました。でも彼はすぐ良い方法を思いつきました。軍隊の中で比較的年をとっている馬を何頭か、戦車から解いて自由にさせてやり、軍隊の先頭を歩かせました。自由になった馬たちは一斉に駆け出しました。軍隊がその後について走ると、間もなく山を抜けて街道に出て、無事に帰国することが出来ました。こうして管仲は軍隊を無事に帰国させたのでした」。

言葉の説明は、「歳をとった馬は道を良く知っていると言うのは、経験の豊富な人は、状況を良く知っているの、問題の解決をするにも的確な道筋を知っているということの喩え」となっています。

例文は、「このことは、ベテランの張さんが処理してくれたので、すぐにみんなが満足する結果になった。本当に、『老馬は道を知る』だね」となっていました。

日本語では「亀の甲より年の功」という言葉を、同じような意味で使いますね。私は実際に訊いたことが無いのですが、物の本に依れば、「イカの甲より年の功」という言い方もあるようです。確かにこちらの方が年の功を讃えるのには適していますね。亀の甲はべつ甲として珍重されますから、年の功と同等ですものね。

日本の諺としても、「老馬は道を知る」と言う句があります。しかし、「老馬」という言葉のせいでしょう

うか、面と向かった誉め言葉としては使われず、もっぱらその場にはない方に対する誉め言葉となっているようです。

ここでちょっと、7月号で紹介した「一鳴驚人」について、再度お話をさせてください。

7月号わんりいの発送を終えて、皆様のお手許に届いたかなと思った頃に、会員の平島さんからお電話を頂きました。

お電話で平島さんは、7月号のこの欄でご紹介した「一鳴驚人」が、齊の威王の話となっていますが、

「この話は元々『史記』に載っている話で、春秋時代の楚の荘王の話として聞いている。戦国時代の齊の威王より楚の荘王の方が古いのだから、楚の荘王とする方が良いのではないか」とご指摘くださいました。

私はといえば、もともと史記に出て来るお話であるのは知っていましたが、

主人公の王様の名前まで覚えていなかったの、何も考えずに、本に書いてあることをそのままご紹介したのでした。ご指摘を受けて、慌てて調べてみたら、何と、史記にはこの同じ話が2回出て来るのだそうです。

一つは、平島さんのご指摘通り、春秋時代、楚の荘王(在位B.C.613～597年)のお話として、史記の世家列伝に出て来ます。王様のエピソードとして語られ、謎かけをした家臣は、申無畏とも伍挙とも言われています。もう一つは、本に出て来るように、戦国時代の齊の威王(在位B.C.356～320年)のお話ですが、こちらは世家列伝ではなく、滑稽列伝・淳于髡の項に載っているのです。つまり主人公は淳于髡なのです。そして、注釈に、「楚の荘王にも同じ話があるが、後世、齊の威王と淳于髡の話として語られることが多くなった」と出ていました。このせいで、この本では齊の威王の話として紹介されているのでしょう。

平島さんのご指摘のお陰で、知識が一つ増えました。ありがとうございました。

